



能登やさしいこめづくり情報

平成30年8月
能登米振興協議会
能登米生産者協議会
能登南部営農推進協議会
J A 能登わかば

中生収穫編

《適期の収穫・乾燥調製で中能登産コシヒカリの総仕上げ》

間もなく、コシヒカリの収穫が始まります。本年は昨年よりも成熟期が早いので（下表参照）、必ず籾の黄化程度を確認し、**適期刈り取り**、**適正な乾燥・調製作業**を行ない、きれいな中能登産コシヒカリの生産に努めて下さい。

また、「晩植のコシヒカリ」や「ひゃくまん穀」など収穫まで日数があるほ場や品種では、**適正な水管理（①乾かさない！ ②ずっと溜めない！ ③早期落水しない！）**を継続し、登熟の向上に努めてください。

【本年の刈取り適期の目安（8月20日調査）】

品 種	出穂期	本 年	(参考) 前年
コシヒカリ	7月29日	9月1日～6日（山間地は3日程度の遅れ） ※ ほ場の籾黄化率（下記参照）を必ず確認！	9月9日～15日

※ 全ての茎から穂が出た「穂揃い期」とは異なり、「出穂期」は全ての茎の半分（5割）から穂が出た時期です。

※ 上記の刈取り適期は上記の出穂期に対応したものです。出穂期や田植え時期・ほ場条件・生育条件等によっても、刈取り適期は前後するので、上記の目安を参考の上、ほ場の**籾黄化率**を必ず確認し、適期収穫に努めてください。

※ 今後の気象条件等によっては刈取り適期が早まる場合もあります。

※ 基幹防除（農薬散布）を実施した場合は、農薬の使用時期（収穫前日数）を守って収穫を開始してください。

1. これからの水管理について（**① 乾かさない！ ② ずっと溜めない！ ③ 早期落水しない！**）

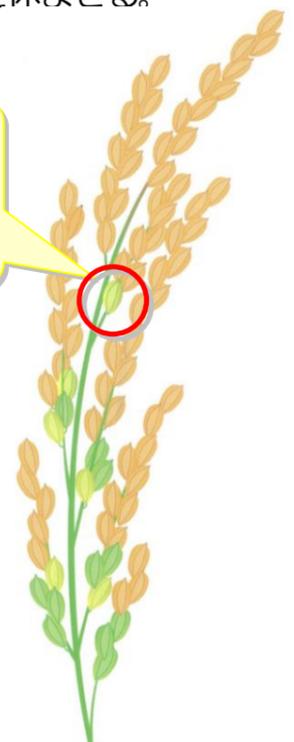
(1) 間断通水の実施

- ・ 今年登熟期間が高温で経過しており、**早期の落水は着色粒や胴割粒の発生及び下葉の枯れ上がりによる倒伏を助長するので、刈り取り直前（3～5日前）まで、間断通水を継続する。**
- ・ 晩植コシヒカリやひゃくまん穀など収穫まで日数があるほ場では、天候に応じて通水を実施し、極端に土壌を乾かさない。
- ・ 日中の気温が30℃を超える日が多いため、できるだけ夕方からの通水によりほ場を冷やし、夜間に稲体を休ませる。
- ・ 根を傷めるおそれのある日中の湛水を避け、効果的な通排水により根の健全化に努める。
- ・ ため池など用水不足が懸念される地域では、計画的な水利用に努める。

(2) 台風時の水管理

- ・ 台風の接近でフェーン現象（熱風や高温）が予想される場合は、一時的に湛水し、稲体の急激な乾燥を防ぎ、現象が治まり次第、排水する。

先から3つ目くらいの枝梗（しこう）の根元の籾に青みが残る程度



籾黄化率80%の穂のイメージ

2. 刈取り作業について

(1) 刈取り時期について

- ・ 本年のような**高温登熟年（出穂以降、高温で経過）**は籾の黄化の進みが早く、**刈り遅れると胴割粒が発生しやすい。**
- ・ 高温登熟年は**籾黄化率80%（平年は85%）から刈取りを開始し、刈り遅れないよう黄化率85%までに収穫を終える。** → **胴割粒の発生防止**
- ・ 高温登熟年におけるコシヒカリの刈取り適期の目安は登熟積算温度（出穂期から日平均気温を積算）で980～1030℃（平年は980～1100℃）。

【籾の黄化程度による刈取り適期の目安】

籾の黄化程度	30%	40%	50%	60%	70%	80%	85%	90%
刈取り適期（高温年）	13～14日後	11～12日後	9日後	7～8日後	5日後	刈始め	適期～刈終わり	刈遅れ

高温登熟年は籾の黄化が一気に進む

収穫期間

籾の黄化率を確認して、刈り遅れないように収穫すること！

(2) 刈取り前にほ場内のクサネムは必ず除去する

- クサネムの種子が混入すると、ライスグレーダーで取り除けないため**異物混入で落等**となります。

(3) 早期倒伏部分、早期登熟（ヤケ照り）部分は別刈・別乾燥で調整

- 早期（収穫期1週間前より早く）に倒伏した部分は乳白粒等の未熟粒が発生します。
- 水不足等で早期に登熟（ヤケ照り）した部分は、胴割粒・未熟粒・着色粒が発生しやすいため、別刈りや別乾燥し、調製を行う。



クサネム種子(左)と玄米(右)

(4) 刈取った籾は、速やかに乾燥機へ張込む

- 刈取りから**4時間以内**に乾燥機へ張込み、通風しておくことでヤケ米の発生を防止する。
- 高水分籾はヤケ米の発生を助長するので、降雨直後などは無理に収穫を行わない。

3. 乾燥・調製作業について

(1) 高温による急激な乾燥は行なわない

- 35℃以下で、乾減率0.8~1.0%/時程度とする。**(胴割粒の発生防止)**
- 高水分籾の場合は、通風乾燥の後、送風温度を上げる。

(2) 水分ムラ、余熱乾燥・戻り乾燥に留意（乾燥機の水分計を過信しない）

- 高温登熟年は適期に収穫しても籾水分にムラがあるため、2段乾燥法（水分18%程度で乾燥機を止め、1昼夜程度調湿した後、仕上げ乾燥する方法）を用いる。
- 青米粒の混入割合によって、乾燥機を止める時の水分や停止後の水分変化に違いがあることに留意する（右表参照）。

【乾燥機の停止水分判定表】

100粒中の青米粒	乾燥機を止める玄米水分	乾燥機停止後の水分変化
0~5粒	15.5~15.1%	乾く（下がる）
6~10粒	15.0~14.6%	ほとんど変わらない
11粒以上	14.5%	戻る（上がる）

(3) **籾摺機の点検整備の実施**

- 作業開始前だけでなく、作業中も合間を見て調整を実施（**もみ混入、肌ずれ粒発生防止**）
- ロールの間隙は籾厚の1/2を標準とし（締めすぎると胴割粒、広いともみ混入）、ロールの磨耗等にも注意する。

(4) ライスグレーダーはL網（1.85mm）~LL網（1.9mm）を使用し、調製は適正流量で仕上げてください。

※ひやくまん穀は必ずLL網（1.9mm）を使用すること

4. 稲わらの土壌還元について

- 能登米生産（能登⑧③④①たんぼづくり運動）では、生活環境への配慮や二酸化炭素排出削減のため、収穫後の稲わらの焼却を禁止しています。
- 中能登の土壌は、稲の生育に最も重要な成分の1つである「ケイ酸」が他の地域より特に不足しています。稲わらは「ケイ酸」を多く含んでいるので、来年以降の良質米生産のために、必ず土壌にすき込んで土づくりに活用してください。
- 壤中の微生物が活発に活動できる気温の高い時期（10月中）までに**秋起こし（耕起作業）**を行うことにより、稲わらの分解を促進しましょう。また、それにより来年以降の藻類やガス（わき）の発生が抑制されることが期待できます。



5つの1か月対策のポイント

- 【1】育苗日数は、1か月以内（20~30日間）
- 【2】中干し開始は、田植え1か月後
- 【3】中干し期間は、1か月間（コシヒカリ）
- 【4】中干し後から出穂までは、約1か月間（コシヒカリ）の飽水管理
- 【5】出穂から刈り取り直前までの1か月以上は、
①乾かさない・②ずっと溜めない・③すぐ落とさない

今回の
ポイント!!